

個や集団の成長を促す教育的支援の在り方

－自己存在感を高めるための支援の在り方－

唐津市立外町小学校 教諭 堤 葉月

佐賀県立杵島商業高等学校 教諭 真島 茜

1 研究の趣旨

今，児童生徒を取り巻く現実には厳しく，友達とのけんかやトラブルが絶えない，学校生活になじめず登校できない，周囲に流されてつい問題行動を起こしてしまうなど，様々な問題を抱えている。その根底には，「自分に自信がない」「自分が価値ある存在だと感じるができない」といったことがあると考えられる。言い換えると，学校生活の中で自分の存在価値，つまり自己存在感を感じる事ができていないのではないかと考えた。

児童生徒が生き生きと自分を輝かせるためには，ありのままの自分を認め，自己存在感を高めることが重要な要素となると考える。自己存在感を高めるためには，まず，それを支えるものを育てていくことが必要となってくる。そこで，自己存在感を支えるものを挙げ，それらを基盤としてとらえた。自己存在感を支える基盤となるものが育っていけば，自己存在感の高まりが期待できると考えた。自己存在感が高まることで，児童生徒が自分に自信をもつことができるようになり，個々のもつ力を発揮することができるであろうと考えた。

そこで本グループでは，自己存在感に着目し，ありのままの自分を認め，新たな自分に気付くことができる姿を個の成長としてとらえ，「自己存在感を高める支援の在り方」というサブテーマを設けて，「個や集団の成長を促す教育的支援の在り方」の研究を進めた。

2 研究教科・領域等

生徒指導・教育相談において研究課題の解決に向けて研究を行った。

3 研究の成果

(1) 自己存在感を支える基盤

自己存在感を「自分が価値ある存在であると感じられること」と定義し，ありのままの自分を認め，新たな自分に気付くことができる姿を自己存在感の高まりととらえ，自己存在感を支えるものを明らかにしようと理論研究を進めた。「ありのままの自分を認める」とは，今の自分を「他者とは違う，かけがえのない自分」として認識し，その自分に対して自信をもつことができることであり，「新たな自分に気付く」とは，これまでの自分に対しての認識範囲が広がることであると考えた。児童生徒が，ありのままの自分を認め，新たな自分に気付くためには，まず，今の自分を見つめることが必要である。さらに，他者や集団の中で様々な感情を味わいながら，自分の有り様を再確認する中で，児童生徒は，自分への見方を修正・拡大していくことが大切であると考えた。

理論研究を進めていく中で，自己存在感を支えるものとして，自己受容，自己理解，自己発見，自己肯定感，所属感，成就感，有用感の7つを挙げた（次頁図1）。「ありのままの自分を認める」ためには，今の自分を振り返り，見つめることで自分というものを知り（自己理解），自己を肯定的に受け入れていく（自己肯定感）上で，等身大の自分そのものを受け入れて（自己受容）いこうとすることが重要であると考えた。また，児童生徒が，新しい自分を発見（自己発見）することで，自分への見方を修正したり広げたりすることができるであろう。さらに，個々が成長していく中で，

他者や集団の中でのかかわりを通して、「成就感」や「有用感」, 「所属感」といった感情はぐくまれることで, 集団の中での自分の存在価値を, 感じられるようになる。したがって, この7つを自己存在感を支える基盤としてとらえ, これらを育てていくことで, 自己存在感の高まりに迫ることができる。と考えた。

(2) 3つの視点による基盤へのアプローチ

7つの基盤に対して, どのようにアプローチするかが, 自己存在感を高める上で重要であると考えた。また, 児童生徒一人一人の状態や学級集団の状態, それぞれの発達段階に沿った適切な支援が必要となった。つまり, 教師がねらいを明確にしながら, そのねらいに迫るための視点をもってアプローチしていく必要があると考えた。そこで, 集団の中での「かかわり」という点で視点を探

っていき, 下記の視点にまとめた。「①自分の振り返りの中で」「②人とのかかわりの中で」「③集団でのかかわりの中で」の3つである。

自己存在感の基盤へ3つの視点でアプローチしていくに当たり, 構成的グループエンカウンター(以下SGE)に着目した。その理由としては, まず, SGEが, 他者とのかかわりを通して集団を育てながら個を伸ばしていくという特性もっているからである。また,

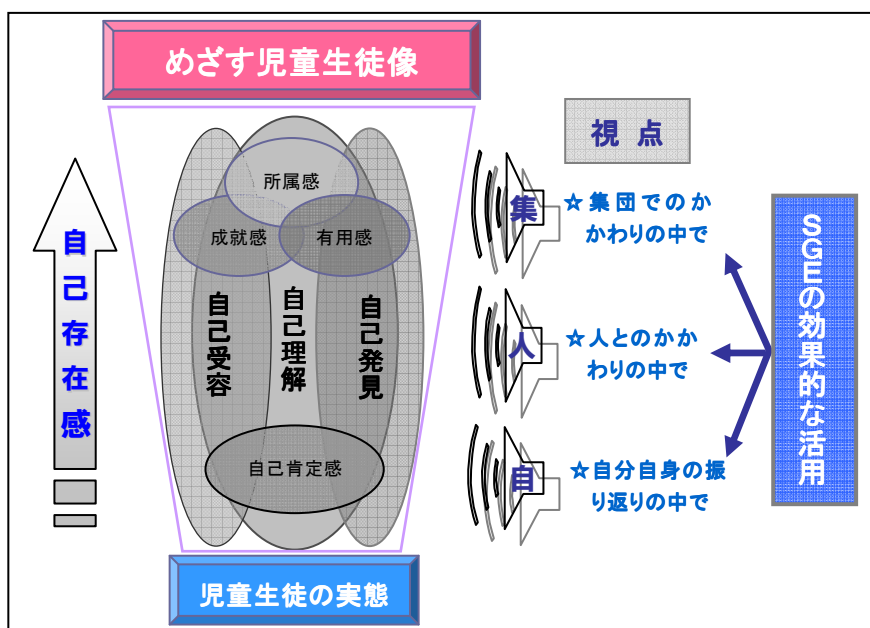


図1 自己存在感の高まり

また, SGEのエクササイズには, 「自己理解」「他者理解」「自己受容」「自己主張」「信頼体験」「感受性の促進」という6つのねらいがあり, 自己存在感の基盤と重なっていたり, つながっていたりするものが多いという点で, 自己存在感の高まりに有効な手立てであると考えた。3つの視点をもってエクササイズを効果的に活用しながら7つの基盤にアプローチすることで, 自己存在感の高まりが期待できると考える(図1)。また, SGEは, 学校現場において, 意図的に場を設定することができるので, どの視点でアプローチし, 自己存在感の高まりに迫るかということを確認にした上で継続的に取り組んでいけば, ありのままの自分を認め, 新たな自分に気付くことができる児童生徒が育つと考えた。

そこで, 児童生徒の発達段階や校種の特徴を考え, 幾つかの基盤に絞った上で, 効果的と考えられる視点からアプローチするプログラムを組み, 実施した。

4 今後の課題

- (1) より個に応じた支援とするために, 児童生徒の状況や発達段階に応じ焦点化した基盤に, 3つの視点を用いて継続的にアプローチしていくための方法を検証していく必要がある。
- (2) 一人一人のニーズに合った細やかな教育的支援をしていくために, 教師自身のスキルアップの充実に加え, 学校内の環境整備や教師間の共通理解を図っていく必要がある。